福音新聞
THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会
宣教110～120周年
標　語
共に生きる
いのちの天幕を
広げよう

1963年9月20日　第3種郵便物認可（毎月一日発行）
2023年８月１日（火）第829号
発行所　福音新聞社（1部100円）
〒169-0051東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398 info@kccj.jp
発行人 / 中江洋一・編集人 / 金 柄 鎬
印刷所　青丘文化社

＜2023年 在日大韓基督教会･日本基督教団 平和メッセージ＞

在日大韓基督教会　総会長　中江　洋一
日本基督教団　総会議長　雲然　俊美

主はこう言われる。正義と恵みの業を行い、搾取されている者を虐げる者の手から救え。
寄留の外国人、孤児、寡婦を苦しめ、虐げてはならない。またこの地で、無実の人の血を流してはならない。（エレミヤ書 22章３節）

新型コロナウィルス感染症（COVID－19）は、日常の私たちの生活を揺るがし、身体に危険を及ぼしたばかりでなく、社会構造や経済構造の弱い部分に打撃を与え、矛盾や不平等を露呈させ、孤立と分断を増長させました。その不安や対立が暴力や戦争まで引き起こし、感染症が収束に向かう中でも、世界が未だに大きな混乱の中にあります。

主イエス・キリストは、ご自身の十字架によって敵意の中、垣を壊し二つのものを平和の中で一つにしてくださいました。私たちは主イエス・キリストこそ和解と平和の主であることを信じ、主が私たちに求められる隣人愛を心に刻み、この愛から生まれる平和だけが、この世界の危機を克服出来るものと信じ、ここに平和メッセージを宣言いたします。

＜関東大震災100周年について＞

1923年９月１日に関東大震災が発生し、今年、100周年を迎えます。10万人を越える貴い命が犠牲になったことを忘れません。しかし、それと同時に、震災の混乱の中、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」「朝鮮人が放火した」などの流言飛語により6,000人の在日朝鮮人・中国人が警察及び自警団によって虐殺されたことを忘れてはいけません。平時には普通である一般市民が、天変地異が起こるとこのように豹変し、人間が同じ人間を殺すという狂気に陥るさまに戦慄を覚えます。また人間の心の奥底に潜む罪深さにおののきます。

100年たった現在でも、寄留外国人に対するヘイトスピーチなどの人権侵害が続いています。私たちは、すべての人の命を贖うキリストへの信仰に基づき、「すべての人と平和に暮らしなさい」（ローマの信徒への手紙12章18節）との御言葉に従って、差別のない社会が実現することを願い祈っています。そして、そのための愛による働きにあずかることを志しています。緊張と不安に満ちた今日の状況の中でこそ、社会の中で弱い立場に置かれた人々が守られ、支えられなければなりません。社会の動揺に乗じたあらゆるヘイトに反対し、この社会に生きるすべての人々の人権が守られるよう願います。

＜「入管難民法」改悪について＞

2021年に廃案となった「出入国管理及び難民認定法(入管難民法)」の改悪案を一部だけ修正したものが、今年５月９日に衆議院で可決され、６月９日に参議院で可決、成立しました。これに対し、わたしたち日本基督教団と在日大韓基督教会は強い憤りをもって抗議します。政府の法案は「難民申請者」や、在留資格を失った「無登録外国人」（非正規滞在者）を、さらに窮地に追い込む改悪法となっています。本来ならば、世界人権宣言および難民条約に基づいて難民認定制度を抜本的に改正し、日本がすでに加盟している国際人権諸条約に沿って入管収容制度を改正すべきです。私たちはこの「改悪」入管難民法の実施に反対し、廃案を求め、難民申請者や無登録外国人一人一人の命と生活を支える市民社会の働きに連帯して行きます。

＜ウクライナにおける戦争について＞

2022年２月24日にロシアがウクライナに侵攻してから、すでに一年半が過ぎました。現在も戦争は終わる気配がありません。その間も子どもたちを含めた尊い命が奪われ続けています。

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」（イザヤ書 ２章４節）

一刻も早く戦闘が中止され、ウクライナおよびロシアの兵士たちの命が救われることを強く望みます。社会インフラ・ライフラインの復興とともに、傷ついた人々の心のケアのために世界中の教会が力を尽くすことを願います。

ロシアの核による威嚇や使用は主の前で決して許されません。すべての為政者たちの良心が呼び覚まされ、私利私欲と傲慢な思いを捨て、正しい選択を行うように切に祈り求めます。現在行われている「戦争という名の大量殺人」が、一刻も早く中止されることと、そのために主なる神が働いてくださることを心から願います。

＜日本の原子力政策について＞

2011年の東京電力福島第一原子力発電所爆発において「絶対安全」「経済に必要」という「神話」に彩られてきた日本の原子力政策は、完全に崩壊し、12年を経た今もなお事故収束は全く目処が立っておりません。それにも拘わらず、日本政府は原発の新規建設や60年を超える運転を認めることを盛り込んだ「GX（グリーン・トランスフォーメーション）実現に向けた基本方針案」をとりまとめ、福島第一原子力発電所で増え続けるALPS処理水（トリチウムなど放射性物質を含んだままの汚染水）を地域住民や漁業関係者との約束を無視して、また近隣諸国の反対の声を聴くことなく、今年中に海洋投棄することを決定しました。

わたしたち日本基督教団と在日大韓基督教会は、ALPS処理水の海洋投棄や、日本政府が提唱する「基本方針」に断固抗議をし、今なお、強いられたヒバクによって痛み、脅かされている命と連帯して行きます。

折尾教会

李恵蘭牧師委任式挙行

別府教会開拓や沖縄教会等担任

創立73年を迎えた2023年6月25日、折尾教会は昨年10月より臨時牧師として牧会をしてきた李恵蘭牧師を担任牧師として迎える委任式を挙行した。

委任式の礼拝では、司式と説教「祝福される人生」（創12：1～5）を地方会長辛治善牧師、司会と勧勉は臨時堂会長金聖孝牧師が行い、そして李恵蘭牧師の妹である李恵貞牧師の特別讃美が行われた。また、近隣の日本基督教団北九州地区の牧師信徒の方々、日本キリスト教会九州中会の方々がかけつけてあいさつを述べた。54名の参加者のあたたかい祝福に包まれた委任式であった。

李恵蘭牧師は1956年韓国で生まれ、清州師範大学、監理教協成神学大学院を卒業し、監理教宣教師として日本に派遣され、2000年にKCCJに加入、別府教会の開拓を始め、沖縄教会で担任牧師を務めた。地方会牧師として西南地方会において伝道の使命を果たすべく仕えてこられた。　（報告：金聖孝牧師）

平和統一会議準備委員会オンラインセミナーを開催

「韓半島情勢とKCCJの課題」テーマに

平和統一準備委員会（委員長：金鐘賢牧師）によるオンラインセミナーが、2023年７月４日（火）19：00に行われ、総会の各教会から教役者、長老、全国教会女性連合会、合わせて46人が参加した。

「停戦70周年を迎えた韓半島の情勢とKCCJの課題」という主題のもと、講師として李恩珠牧師（アメリカ長老教会世界宣教部の北韓担当）をZoomに招き、「なぜディアスポラの私たちは、分断と和解について話すのか」という題目をもって、(1) 停戦70周年を迎える南北の現状と (2) 世界教会協議会（WCC、EFK）を含むキリスト教界の南北平和統一のための動きなどの講演を行った。

李恩珠牧師は、ご自分が朝鮮戦争の際に両親の避難先の済州島で生まれ、14歳の時に親に連れられブラジルへの移民船に乗り、また数年後にはアメリカに渡ってディアスポラとして生きた経験を語りながら、同じディアスポラとして、今日の韓半島の和解と平和のためにできること、またKCCJは、南北教会の行き来がなかった頃、東京で南北教会指導者たちの出会いを用意した経験を活かすべきであり、在日コリアンクリスチャンとしてユニークな役割を果たし、本当に苦しい今の韓半島や日本、アメリカの状況において、できること、すべきであることを推し進め歩むべきであると訴えた。

全国女性会

2023年度研修会リモートで開催

プラハの教会とウクライナ支援を聞く

全国教会女性連合会宣教社会局主催の2023年度研修会が７月１日（土）13時よりリモートで開催された。

今回の研修会は、ロシアの軍事進攻によりチェコに避難したウクライナ避難民支援に従事した孫信一牧師（西宮教会）と関梅羅師母を講師として迎え、現地の実態を知る貴重な機会となった。

開会礼拝は孫信一牧師により「主に接ぎ木された者として～共に生きる～」（ローマ書11章16～18節）のもとメッセージが述べられた。

講演Ⅰは、孫信一牧師が14年間日本語礼拝の担当牧師として宣教活動をしたチェコ・プラハのコビリシ教会の紹介と、プラハの欧州における地政学的な観点から、現在のプラハの置かれている実情を学んだ。

講演Ⅱは関梅羅師母からコビリシ教会でのウクライナ避難民の方々との交流など動画や写真で活動紹介があった。支援として、住まい、生活していく上での必需品などがまだまだ十分ではないこと、職を得ることの難しさ、軍事進攻が続くなかでの不安とこれからの問題点が指摘された。今後どのような支援が必要なのか、私たちに何ができるのか課題は残されたままであるが、とても有意義な研修会であった。　（報告：李好子執事）

東京中央教会

田亀七長老将立式挙行

2013年より東京中央教会で奉仕

去る７月９日（主日）午後４時より、東京中央教会において田亀七長老将立式が挙行され、関東地方会の各教会から大勢の方々が参席し、堂会長の金伸禹牧師の司会に従い恵み溢れる式典となった。

礼拝説教を総幹事の金柄鎬牧師が「寄留者の霊性」（出２：16～22）という題で行った後、関東地方会長の金容昭牧師の司式のもとで将立式が進められ、誓約、按手祈祷及び、宣布が行われた。

今回東京中央教会の長老として将立された田亀七長老は、1959年韓国で生まれ、大韓イエス教長老会の金城教会にて洗礼を受け、按手執事となった後渡日し、2013年より東京中央教会に出席し奉仕してきた。

宣教委員会主催セミナー
ポストコロナ時代の宣教課題について

ポストコロナ時代に変化する宣教的な課題(AI時代、チャットGPTなど)を専門家の講演を通して私たちの宣教現場を診断する。時間を設けました皆さんの積極的なご参加を宜しくお願い致します。

日程：2023年 8月 20日(主日) PM 7:30ー9:30
場所：ZOOM参加　(韓国語による講演)

IDとPWは追後連絡致します。

対象：教役者と信徒　　締切：8月 17日（木）まで

申込：書記 李重載牧師（ljjae21@hanmail.net ,090-2045-7388）
お問合せ：委員長 趙永哲牧師（080-5318-9058）

監理教神学大学校 教授
地球村牧会研究所 所長
監神宣教訓練センター
責任教授
M-Coaching Center 代表
その他多数

講師：張聖培牧師
저 서
메타버스 선교로 사역을 확장하라 (2022)
예수님 처럼 사역하라 (2018)
우리가 교회다(시즌1.2.3) (공저)
사명을 다하는 교회로 바로 세워라 (2009)
사명 리더십으로 바로 세워라 (2009)
글로벌시대의 교회, 문화, 그리고 사이버스페이스 (2001)
그 외에 공저 및 논문 다수

在日大韓基督教会　宣教委員会

全国教役者修養会開催

「現場の声～私のKCCJ宣教とは?～」テーマに

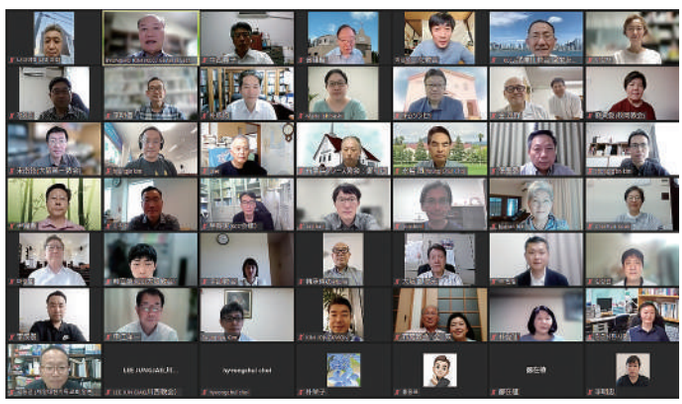
2023年７月17日（月）午後１時～４時にかけて教役者修養会がzoomで開催され、51名が参加した。

修養会のテーマを決めるために、教育委員会では、ポスト・コロナ、教勢の減退、KCCJのアイデンティティ、牧師の再教育、多様な背景を持つ教役者間の関係の構築など、さまざまなテーマについて何度も討論を重ねた。結果、「現場の声を聴くことから始めよう」ということになり、「現場の声　～私のKCCJ宣教とは？～」というテーマに決まった。

朱文洪牧師の開会祈祷によってはじまった修養会の司会は李相徳牧師がつとめた。15分の発題、15分の質疑という形式で進められ、発題に４名の牧師が応じた。3人の人に焦点をあてて展開された趙原哲牧師（三沢教会）の物語、地域住民との緊密な関係を結んだ蔡銀淑牧師（大垣教会）の物語、これまでに三つの教会に赴任した旅路を通じて与えられた主の恵みを回顧した鄭守煥牧師（新居浜グレース教会）の物語、バスケットボールを通して地域の10代の若者たちが教会を居場所と感じるようになったエピソードを語った郭鏞吉牧師（沖縄教会）の物語など、現場の声がいきいきと伝えられた。発題の後におこなわれた質疑応答の時間には、参加者から積極的に質問が出され、また、激励の声もかけられた。すべての発表と質疑応答が終わった後の自由発言の時間を通して、さらに対話は続き、互いに感想をわかちあった。

李明信牧師の閉会祈祷によって会を閉じた。関わったすべての委員、参加してくださったすべての方々に感謝する。

（教育委員会　李相徳）



関西地方会　アシュラム祈祷修養会開催

大邱CTS勧士合唱団と水曜讃揚礼拝も

関西地方会伝道部主催の2023年アシュラム祈祷修養会が、『祈りと信仰の回復』（マルコによる福音書11章24節）を主題に、６月11日（主日）午後３時から午後５時まで大阪教会で開催された。コロナパンデミック以後、久しぶりの対面集会として95名が参加した。

プログラムとしては、まず伝道部長趙永哲牧師（大阪北部教会）による挨拶と祈りの後、京都教会青年会讃美チームの引導による「讃美の時間」、講師である韓承哲牧師（神戸東部教会）の「ダビデの祈り」（サムエル記下7章18～24節）という「御言葉の時間」があった。

その後、姜宇烈牧師（奈良教会）夫婦による恵みの讃美があり、平野真希執事（浪速教会）と宋承美執事（大阪教会）の「証しの時間」、そして、「祈りの時間」としてそれぞれの祈りのテーマを持ち、教会と礼拝の回復のため（高慶美長老、女性部長）、祈りと信仰の回復のため（李承厚牧師、京都シオン教会）、和解と平和の回復のため（申容燮牧師、社会部長）の祈りの時間を持った。

コロナ禍以後、対面集会として恵みの時間を持つことができたことを神様に感謝し、そのため準備して下さったすべての方々に感謝したい。

また、同じ伝道部主催の行事として韓国大邱CTS勧士合唱団と共に水曜連合讃揚礼拝が、６月14日（水）午後７時より大阪教会でささげられ、124名が参加した。

（報告：伝道部長 趙永哲牧師）

＜お知らせ＞

●2023年８月14日（月）～18日（金）まで、総会事務局は夏季休暇のため業務をお休みします。

公告　在日大韓基督教会 第57回 定期総会 召集

在日大韓基督教会 第57回定期総会を総会憲法第13章（総会）、第60条（定期総会組織）、第61条（定期総会召集）と総会規則第２章（定期総会）、第３章（総代）第３条（総代及び準総代）、に基づいて次のように召集します。

（1）標語：『메마른 땅에 은혜가 샘솟는 교회』(이사야44：3)
「乾いた地に恵みの泉が湧く教会」（イザヤ44：3）

（2）日程：2023年10月８日（主日）18：00～10日（火）17：00

（3）会場：在日大韓基督教会 東京教会　東京都新宿区若宮町24（☎03－3260－8891）

※「総代・準総代の交通費・宿泊費は各地方会が負担し、女性会・青年会代表はその機関が負担する」（総会規則 第３章第３条４項）

2023年８月１日

在日大韓基督教会　総会長 中江洋一　書 記 張 慶 泰

特別連載 6

1923ジェノサイドの記憶と十字架の信仰(6)

―関東大震災朝鮮人虐殺100周年を迎え―

金 性 済 牧師（日本キリスト教協議会総幹事）

＜6＞ 「不逞鮮人」とはだれのことか

関東・朝鮮人大虐殺という事態と共に広がった流言蜚語において、当時の朝鮮人は「不逞鮮人」と呼称された。この言葉は、いつどのようにして生まれ、何を意味したのか。

日本の朝鮮植民地化のために、朝鮮での日本軍による植民地戦争は1894年からの第二次甲午農民戦争（～1895年1月）から始まり、日露戦争下の民衆迫害（1904年～1905年）、義兵戦争（1906年～1915年）として繰り広げられた。その当時は、朝鮮の植民地化に反対の示威を行う人々は「朝鮮暴徒」と呼ばれていた（『朝鮮暴徒討伐誌』朝鮮駐箚軍司令部1913年）。韓国強制併合翌年の1911年、「寺内正毅総督暗殺計画」という捏造事件を扱った『不逞事件ニ依ツテ観タル朝鮮人』（国友尚謙）の中で、「不逞」という言葉が朝鮮総督府によって初めて用いられた。しかし、その文書においても、「不逞鮮人」ではなく、「不良鮮人」や「排日鮮人」と呼ばれている。「不逞鮮人」が植民地統治側の行政用語として常用されるようになったのは、朝鮮半島北側の国境を越えた中国側の間島省琿春に所在した日本領事館が朝鮮半島側から避難してきた独立運動家を、1916年ごろから「不逞鮮人」と呼称し、独立運動家の「討伐・殲滅」に取り組む日本軍部に「不逞鮮人」拠点の情報を伝達していたことに始まったと考えられる（『在外不逞鮮人　自一九二一年－至一九二五年』所収：金正柱編『朝鮮統治史料　第八巻』）。

それでは、「不逞」という言葉はどこに由来するか。『春秋左氏傳 隠公十一年』（中国春秋時代＜BC722～BC5世紀＞の国、魯の歴史書）に「曰、天禍許國、鬼神實不逞于許君、而假手于我寡人。借手于我寡德之人以討許。」（いわく、天が許の国に禍をくだし、鬼神たちも實に許の王に逞〈こころよ〉くない思いをいだく。したがって、仲間を集め許を討つこととする。）つまり、元来「不逞者」とは天命に背いたがゆえに、禍として罰が下されてしかるべき存在という意味を含む。これを日本の朝鮮植民地統治に移しかえれば、「不逞鮮人」とは、日本における天命である天皇の聖旨に背き、「文明国日本」に朝鮮を併合してくれた天皇の恩義を裏切る大罪を犯す存在となる。そのような理解が前号で取り上げた『教育勅語』における「一旦緩急アレハ」とつながり、関東大震災時に暴動を起こした「不逞鮮人」を軍隊・官憲・在郷軍人会・自警団が敵として討伐・殲滅することは国家の大義であると加害者の精神構造の中で正当化されていったといえる。

ところで、関東大震災のちょうど一年前の9月、プロレタリア文学者、中西伊之助は小説『不逞鮮人』を雑誌『改造』9月号に掲載した。内容は、自称「世界主義者」の主人公「碓井栄策」が朝鮮北西部の「不逞鮮人の巣窟」を訪ねる話。そこで出会ったのは、栄策の想像に反し、1919年、「京城」での三・一運動で殺害された娘の血で汚れたチマ・チョゴリを抱きしめ号泣する主人であった。深夜、栄策の寝床に忍び寄る主人の気配に栄策は寝床で“復讐”の恐怖におびえる。たえられず家の外に飛び出したところ、梟の声を”不逞鮮人”襲来の叫び声と取り違え戦慄。その時、家の中から出てきた主人の一声「便所、どこかわかりませんか」。栄策はついにたどり着く。「不逞鮮人」はどこにいたのか。それは自分自身の疑心暗鬼の中にいたのであり、「すべては自分達民族の負うべき罪」という告白のような思いにふけり、小説は結ばれる。

中西伊之助は、関東大虐殺の一年前に、「不逞鮮人」とは、朝鮮民族の徹底皇民化をめざす大日本帝国の自画像であったことを暗に指摘した。今「不逞鮮人」は、明然と日本社会で語られなくとも、その中に秘められた敵意・蔑視・恐怖心とは果たしてこの日本から消え去ったといえるか、今私たちは「新しい戦前」とも呼ばれるこの日本の大軍拡化の時代に問いかけられている。ゲラサの男に憑りつき、イエスの前で自分を「レギオン」と名乗りながら自分たちをこの地方から追い出さないようにイエスに懇願し、豚の大群を暴走させた悪霊（マルコ5：10）のように、「不逞鮮人」表象は、大虐殺の中で悪霊のごとく軍隊・官憲・自警団に憑りつき、在日朝鮮人に対して大殺戮を引き起こした。この「不逞鮮人」という破壊的自画像の歴史に、100年が過ぎた今も誠実に向き合えず問い直さず沈黙し続けることの中にこの国のもう一つの深刻な悲劇があるのではないか。

新愛知 號外

不逞鮮人一千名と横濱で戰鬪開始

歩兵一個小隊全滅か

更に麻生聯隊から一個中隊を派遣

仙臺電話日二日午後五時より大森方面より約四百名の不逞鮮人横濱に現はれ隊伍を組んで東京方面に向ひ進行し來り遂に歩兵一個小隊と衝突し彼我の間に戰鬪を開始したが一個小隊にては少ないので苦戰の結果全滅の兆ある旨麻布第三聯隊に報じて來たので更に歩兵一個中隊を派遣した其後の情報は未だないが鮮人の數は約一千名と稱せられて居る

鮮人の隱謀

震害に乘じて放火

東京に三千名潜く

逮捕は頗る困難

發電所を襲ふ

鮮人團

◇避難民に開放された宮城

不忍の泥水を飲む

避難民

積極的救助策を講ず

戒嚴司令官任命

奸淫一掃の爲

無賃輸送